

5月18日(日)

庄原駅前フェスタでも
販売しています!



1パック

1,280円 (税込)

西田鮮魚店

わじらし一本巻

うなぎと玉子ときゅうりの相性抜群の

72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

皆さん!こんにちは。おかん巻きの際はありがとうございました。大好評でした。
今回も巻き寿司という事だったので、巻き寿司大臣西浦龍矢が、先週に引き続きコメント書かせて頂きます。
先日、西田専務の家で、藤永さんと僕と専務の3人で薪割りをしました。それにしても暑い!まあ汗が止まりません!薪割りをした後はBBQをして下さると言われたので、めっちゃ頑張りました。
BBQをしていたら肉は勿論ですが、少しバテ気味な僕だったので、夏バテ防止スタミナ抜群の鰻が食べたいなと心の中で思っていました。
そこで店長に「巻き寿司の広告をするなら鰻の巻き寿司がしたいです。」とお願ひしたら「任せろ!」と店長らしい言葉で、鰻の蒲焼を仕入れてくれました。
今までは、鰻の半身を巻いていたのですが、今回は思い切つて!!どーん!!と一本を巻いてます!!
名付けて!『わしらの一本書き』。きゅうりとたまごは欠かせません!鰻!きゅうり!たまご!この相性がとてもなく良いんです!
それと!今日は駅前フェスタでも同じくこの鰻の巻き寿司を販売致しますので、是非お買い求め下さい。
さあいよいよ暑くなりますよ!鰻を食べて暑さに負けない様にしましょう!!

『上野池ものがたり』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



I 一か月ぶり

このチラシの裏に書く私の文章の回数がめっきり減った。なんで？

新鮮市場の祐宗店長が裏面も広告に使いたいと…。

もつとも直接言ってくるのは越道副店長。

このゴールデンウィークもそうだった。商売、商売というところだ。

前回『上野池』という題で折り込みしたのが4月19日。

それから、5月の販売カレンダー、寿司と刺身のカタログ、魚

の日と3週続けてチラシの表裏ともに広告に使った。もちろんOK。

彼らのやる気がうれしい。

ということ、今日5月18日までご無沙汰してしまった。

ほぼ一か月ぶりだが、書くことは決めていた。

II まちがい

『上野池』のチラシが入った土曜日の朝、携帯が鳴った。

画面には『松園 真』。

「今度はなにごと？」時々ある。チラシが入った日の電話。

学校はちがっていたが、中学時代に内海塾で机を並べた私たち

だった。内海塾は一組25人。一列5人で5列。最前列に成績のいい

男子が並び、その後に女子が2列、そしてさらにその後に、その他の

男子たち。私は最後列だった。松園（さん）をつければよそよそし

いので、ここは呼び捨てで）は最前列。勉強できた。

その松園から朝一で電話。やっぱり、まちがいがあつた。

市議選の後だったので、すこしその話をしたあと、

「西田、今日のあれじゃがのう、倉田百三の生家（せいか）いうて書いとつ

たが違うで」

「えっ、うそ」

「上野池のあそこは、百三が療養しとったところじゃけえのう。生

家は本町の元の西上デパートとところで」

言われて気がついた。そうだった、そうだった。うっかりしてい

た。たしかに西上デパートの跡に、『倉田百三生誕之地』という石

柱が立っている。

「上野池のことも書いとったけど武田先生の三部作を読んで

みい。百三のことも書いてあるけえ。武田先生の本は小学校

の前の本屋の『ほなび』においてあるよ。」

III 武田先生

武田先生の本は塩本に教えられて2冊読んだ。

松園がいう三部作とは

① しょうばら―歴史と文学の町を歩く

② 庄原英学校ものがたり―中国山地の慶応義塾分校

③ 上野池ものがたり―広島県北の「桜の園」を歩く

それに平成24年に刊行された『芸備線―中国山地の沿線物語』が

加わって、今は4部作か。

松園は庄原市役所に勤務したあと、田園文化センターの館長をつ

とめたくらいだから、庄原市の歴史や行政に明るい。その松園の前

の田文（でんぶん）の館長が武田先生なんだとか。先生の著書の中にも松園の名

前が出てくる。

武田先生に私はお会いしたことがない。

本の著者紹介によれば、名前は武田祐三。昭和10年生まれだそう

だから昭和100年の今年は90才になれる。私より17才上か。

格致・実業・三高などで教鞭をとられたそう。私の高校時代に

先生は33ゝ35才。三高では一緒することはなかった。あの頃の私

だ。もし習っていたとしても、ちゃんと聞いてはいなかったらう。

高校時代、学園紛争の真っ只中ということもあって、大人になり

かけの私は、生意気で、ろくに授業を受けなかった。それがカッコ

いいと思っていたふしがある。卒業し社会に出て、その先生たち

が、やってこられたことを知るにつけ、しつかり聞いておけばよ

かったと思う。かえすがえすも、もったいないことをしたものだ。

IV 上野池ものがたり

本を読んだ。『上野池ものがたり』。

先生の文は、時代も場所も飛び越える。

「明治時代から昭和40年ころまで庄原町新道にあった森書店が、

明治時代に出版していた英語学習書などについても新事実を紹介さ

れ…」という文がある。

あったあった森書店。大きな本屋さんだった。

私が小学2年生のとき、腹をこわした私を田村医院に連れて行っ

た母が、その帰り小学校の近くにあったこの森書店で『プルターク

英雄伝』という本を買ってくれた。私の記憶にある初めての本だ。

森書店には私と同級生の男の子がいた。店がなくなるのと同時に

転校していったはずだ。今どうしているんだろう。

そうかと思えば「西城川は夏の水泳や釣りという季節の楽しみの

場で、倉田百三も少年期の西城川とのかかわりを…」の次のページ

で「パリ市市内でセーヌ川に架かる美しい橋・ミラボー橋は、詩人

アポリネールの…」という具合だ。

ただ庄原の歴史を語られているだけではない。その時代の中の庄

原が、世界の中の庄原が描かれている。

先生のような存在を郷土史家と呼ぶのだろうが、郷土史家が語る、

その土地の話ほどおもしろいものはない。

武田先生が語る庄原の話ほどおもしろいものはないということだ。

『上野池ものがたり』を読んでそう思う。「へえ」の連発だ。

松園が指摘した上野池の家に關しては『第4章 倉田百三と上野

池』の章にこうある。

「百三は大正2年に第一高等学校を退学して療養生活に入りました。

二十二歳の時のことです。福山の鞆（たまり）などで療養していま

したが、翌年庄原に帰り結核性の病氣なので生家から離れて

上野池のほとりで療養しました。

土居緑氏の『倉田百三と庄原』には、百三が上野池のほとりで

生活したのは大正三年三月から十一月までですが…」

V 伝承

本にはたくさん先の先人の名前が登場する。

生れ育った土地のことを知ることは、自分を深く知ることに通じ

る。なじんだ土地の名、身近な人の話が、いつそう自分を極だたせる。

年をとったからそう思うのか。いやそうではない。若いころなら

もっと、そう感じたはずだ。

ふるさとの話は子どもの時から読み聞かせるからこそ、ふるさと

への想いを強くするのだ。

勉強としてではなく、学術的ではなく、先生が名付けられている

ように『ものがたり』として伝えていければいい。

酒をいただきながら、わにを食べながら語り合いたいものだ。

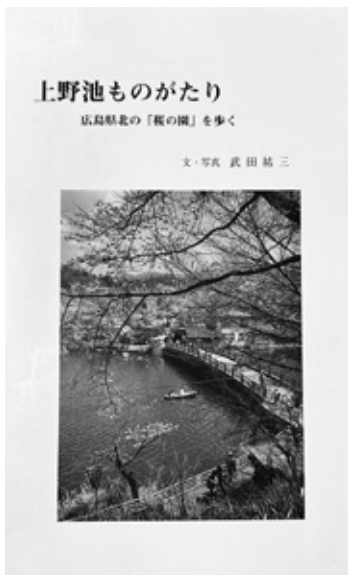
庄原のむかしを、庄原の今を、庄原の未来を。

VI 小さなギャラリー

『第3章 上野公園の開設』の終わりを先生はこう結ばれていた。

上野池畔にも、小さなギャラリーがあれば良いのにとおもいなが

ら歩くことがあります。



2025年5月18日